

「情報」のころ



五木寛之



HIROYUKI
ITSUKI

情報とはなにか。最近しきりにそのことを考える。

斎藤茂吉の『万葉秀歌』（岩波新書）のなかに、有名な大伴家持の歌がでてくる。

「うらうらに照れる春日に雲雀あがり情悲しも独しおもへば」

あまりにも人口に膾炙した人気ナンバーなので、引用するのちょっと気が引けるが、この歌のなかの「ころ」という字に「情」を当ててあるところがおもしろい。

万葉の歌のなかでは、「情」を「ころ」とする例がいくつもある。

「そうか、情は古代日本人のころなのか」

と、納得すると、急に情報という字がちがった感じで見えてきた。

情がころであるのならば、情報というのは、ころをコミュニケーションすることだろう。

私たちはふつう情報という言葉で、乾いたデータとしてとりあつかうことが多い。資料とか、統計とか、数字とか、そんな世界に情はそぐわないのである。

しかし、情報をころのやりとりと考えると、情報社会などという未来も悪くないような気分に

なってくる。

この、気分とか、情とか、感じ、などという湿った気配の世界は、戦後ずっと一貫して知性の敵、科学の対立物のようになつかわれてきた。

抒情、情感、感傷などを追放せよ、というのが1960年代の私たち学生の命題だったのである。濡れたもの、湿ったもの世界からニルアドミラリをめざす私たち若者にとって、重工業地帯の光景をうたう小野十三郎の詩は乾きの聖典のように思われた。

しかし、実際に小野十三郎が愛誦してやまなかったのが啄木の歌、なかんずく「やはらかに柳あをめる北上の岸辺目に見ゆ泣けとごとくに」であったと死後に知って、慚然とせざるをえなかった。

私たちは誤読していたのである。彼は抒情を否定したのではなく、古き抒情を打ち倒し、新しき抒情をつくりだせ、と言っていたのではなかったか。

情におぼれることと、情をみつめることとはちがう。慈悲の慈は知であり、悲は情である。「情」は「ころ」であると覚悟したうえで、あらためて「情報」の重さを考えたいと思うのだ。